
四重唱

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

四重唱

【コード】

N1599D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

当代きつてのドイツ系ソプラノハンナ。彼女は不倫の愛の終焉を今度の舞台と共にする。その舞台の中で四者四様の心が紡がれていく。楽劇『ばらの騎士』を題材にした作品です。

第一章

四重唱

ハンナ・フォン・リューゲンバルトが当代きつてのソプラノ歌手であるとの評価は揺るぎないものがある。それは彼女の母国であるドイツだけではなく世界各国からの評価でもある。

本来はクラシックの世界から見ても僻地である筈がどうにも耳の肥えた者が多い為こちらの世界においても実力をつけるようになってくる日本の批評家達からも高い評価を得ている。

「今一番のドイツ系ソプラノだ」

「このままいけば歴史に残る歌手となる」

そうした評価を受け続け日本での公園も大評判に終わっている。

そうした優れた歌手である彼女だが実はちょっとしたスキャンダルも持っているのだ。

それは不倫である。彼女は若い頃に結婚しその夫とは今でも続けている。だがそれでも彼女は不倫をし、その結果そちらでも世を騒がせることになってしまっている。それも普通の不倫ではないのだ。

普通の不倫でないとするとどうした不倫であるのか。それは相手の問題だ。所謂普通の不倫というのはそれをする者が女であるならば相手は男になる。ところが彼女の場合はそれが女なのだ。その為こちらでも議論となっているのである。

「これは不倫なのか」

「そもそも道徳的にどうなのか」

不倫という時点でそもそも道徳的に問題であろうがキリスト教の影響が強い欧州においては、とりわけ彼女が今住んでいるウィーンといういささか保守的な土壌の場所においてはそうした問題がずっと問題視されるのであった。なおこの問題は日本においては不倫でも何でもないとされている。日本人達の言い分としてはこうである。「相手が男ならともかく」

「レズなら浮気にならないではないか」

そう考える者が多かった。同性愛というものがごく普通に存在してきている日本という国においては変わった趣味という程度で終わるものであった。しかし彼女が主にいるのは欧州でありウィーンなのだ。だからこそ問題であった。

「やれやれだ」

演出家のアルトゥーロ・バジーニはウィーン国立歌劇場の中の一室でゴシップ誌を見ながら溜息をついていた。彼は今度のこの歌劇場の演目の一つ『薔薇の騎士』において演出を担当することになっていたのだ。彼はこのことで大いに頭を悩ませていたのであった。

「こんなことならスカラ座との話に乗るべきだった」

彼はこのシーズンミラノのスカラ座とこのウィーンとどちらにするかで考えていたのだ。だがミラノでやる演目は彼にとっては今まであまり演出をしたことのないロシアオペラの作品でありしかもやたらと解釈も複雑なムソルグスキーのボリス・ゴドゥノフなので止めた。彼もこの作品は好きだが実際に演出するにはより深い研究が必要だと思ったからである。

彼はイタリア人であるがドイツ語にも堪能でドイツオペラの演出も多く手がけている。それでウィーンに来たわけだがそこで思いも寄らぬ問題にあたってしまったのである。

「どうしてもこの歌手なのかい？」

「そうだよ」

彼の向かい側に座る白髪頭のアジア系の男が笑顔で頷く。

「駄目かな」

「駄目かなって」

バジーニはそれを聞いて目の前の男を怪訝な目で見た。この男こそこの歌劇場の音楽監督である大沢清治郎である。日本人ではじめてのこの歌劇場の音楽監督として祖国では有名になっている人物である。

「君は何も思わないのかい？」

「彼女は素晴らしい歌手だよ」

大沢の言葉はバジー二にとっては実能的を得ていないものであった。

「他の歌手達も。そうじゃないのかい？」

「皆君が選んで頼んだんだったね」

バジー二は能天気な彼に対して述べた。剣呑な声で。

「確か」

「そうだよ。それがどうかしたのかい？」

「わかっているのかいないのか」

本人の前でも言う。あまりにも彼が能天気に見えたからだ。どちらかというと祖国の関係でバジー二の方が能天気に見られるし実際に資質もそうなのだが今回ばかりはどうにも大沢の能天気さはあまりにも凄いものであった。そうバジー二は思えるものであった。

「いいかい。マルシャリン役は」

「君が何を言いたいのかわかっているよ」

大沢はバジー二の機先を制してきた。

「あれだろう？彼女の不倫のことだね」

「その通りだよ」

バジー二は剣呑な顔で彼に言うのだった。声も同じものである。

第二章

「しかもだね。相手は」

「わかっているよ」

大沢はやはり平気な顔である。

「何もかもね」

「わかっているよ、わかっているよ、君は」

「何か悪いかい？」

相変わらず平気な顔のままである。バジーニはいい加減切れかけていた。

「それが。わかったうえでこの配役にしたんだ」

「君は慎重派だと聞いていたがね」

シニカルに大沢に対して言った。

「どうやら。それは僕の見間違いだったようだ。それとも世間がわかっていなかったのか」

「けれどこの顔触れだと成功は約束されたようなものだよ」

大沢の声が強いものになった。

「それも。あのカラヤンの旧盤を超えるよ」

「カラヤンのかい」

その言葉を聞いてバジーニも目の色を一変させた。ヘルバルト「フォン」カラヤンはかつてこの薔薇の騎士において録音を二回行っている。そのうちの旧盤は今ではもう伝説的な歌手となっているエリザベート「シュワルツコップとクリスタ」ルードヴィツヒを軸にした歴史的名盤として知られている。当然ながら彼等もこの録音を意識しているのである。

「そしてクライバーにも勝てる」

「クライバーにも」

バジーニの目の色がまた変わった。カルロス「クライバー」はかつてこのウィーンで薔薇の騎士の指揮をしている。この時も名歌手を

揃えて伝説を残しているのである。

「どうだい？それを考えると」

「この顔触れしかないのか」

「他には考えられないね」

バジーニを洗脳するかのように念を押し大沢であった。

「少なくとも僕には。君もそうだと思うけれど。どうだい？」

「確かに」

バジーニもそれに頷いた。いや、頷くしかなかった。大沢が選んだ歌手達は彼から見てもカラヤンやクライバーの演奏を超えることが可能な顔触れだったからだ。

「彼女達しかないか」

「そうさ。だからあえて選んだんだ」

大沢は強い声で述べる。

「彼女達しかいないからね」

「わかった」

バジーニは遂に頷いた。

「じゃあ。この顔触れで行こう」

「よしっ」

大沢も満足した顔でそれに応えた。

「じゃあこれで決まりだね。今日はこれで終わりだ」

「そうだね。じゃあ後は」

「和食はいけるかな」

大沢はさりげなく自国の料理を勧めてきた。

「それと米のお酒は」

「どちらも大好きさ」

バジーニはにこりとした笑みで彼に応えた。彼も日本に行ったこととはある。それに結構和食を食べてきているのである。

「じゃあそれで決まりだね」

「ウィーンにも美味しい和食の店があったんだ」

「そういうのはすぐに見つかるんだ」

大沢の異様に明るい笑顔と共に出された言葉であった。

「それは何故かわかるかい？」

「さて」

バジーニはその言葉に首を傾げる。だが少しだけ考えてから述べるのであった。

「僕はイタリア人だけれどね」

「うん」

「イタリア料理が美味いかどうかはやっぱりトマトだね」

イタリア料理はまずそれである。トマトにチーズ、そしてアボガドでイタリアの国旗が出来上がる。この三つによってイタリア料理は決まるのである。

「それと同じだとすると」

「醤油と味噌だよ」

それが大沢の答えであった。

第三章

「これがいいかどうかで和食は決まるのさ」

「そうなのか」

「そうさ。その店は抜群の醤油と味噌を使っているんだ。だから美味いのさ」

「そうなのか。それじゃあ期待できるんだね」

バジーニも笑顔になっていた。彼も和食はかなり好きだからだ。

ちゃんとした和食は世界中の人間を魅了してやまない。最高の料理の一つなのは間違いない。

「思う存分期待していいよ。それじゃあ行くか」

「ああ。メニユーはそうだな」

「何がいいんだい？」

二人は歩きだしながら話をしていった。もうそれで話ははじまっていたのだ。

「そうだね。ここは刺身に天麩羅に」

「シーフードが好きなんだね」

「そうだね。どうもここではそれが少なくて残念だけれど」

ここでバジーニが残念な顔をしたのはウィーンが内陸にあるからである。オーストリアはドイツに比べるとかなり美食の方であるがそれでも弱点はある。それは海と離れていることである。従って日本人やイタリア人が好む海の幸は少ないのである。もっとも最近では冷凍技術の発達でその弱点もかなり改善されているのであるが。だからこうして刺身だの天麩羅だのといった話もできるのである。

「ウィーン本来の料理はそれがねえ」

「おっと、ウィーンに文句を言うのは禁句だよ」

大沢はそれについては笑って注意するのであった。

「今からそのウィーンの最高のオペラを演奏するんだからね」

「それもそうだね。じゃあ食事の後は」

「どうするんだい？」

「ココアにしよう」

彼は明るい笑顔でそう述べた。

「ウィーンらしくね。ザツハトルテでね」

「わかってるね。けれど和食の方のデザートはどうするんだい？」

「勿論それも頂くさ」

食べ物に関してはかなり許容量の大きいバジーニであった。そのせいか腹が結構出てもいた。それがどうしてなのかは考えなくともわかるものであった。

「後でね」

「わかったよ。それじゃあそれで行くか」

「うん」

こうして二人は和食の後でザツハトルテとココアを楽しむのであった。そのココアを飲みながら今一組のカップルが深刻な顔で話をしていた。

一人は背の高い艶やかな美しい女であった。見事な、そのまま黄金を溶かしたような金髪を上でまとめてありその青い目はさながらサファイアのようにであった。卵の形をした顔も肌も白くその顔立ちはそのままウィーンの貴族のそれであった。白く綺麗な脚が完全に隠れるスカートが実によく似合っている。彼女がハンナ「フォン」リューゲンバルトその人である。今問題となっている薔薇の騎士において主役であるマルシャリンを務めるその人である。その渦中の人物が今ある者と話をしている。それだけでスキャンダルの種となるものであった。しかもその相手が問題であった。

黒いスーツにズボン、ネクタイも黒である。白いカッターと対比されてその黒が実によく映えている。着こなしているその姿も実に整っている。しかもそれを着ているのは女である。銀色の髪をパーマにさせている。瞳は黒で大きくそれが白い肌によく合っている。中性的な顔立ちと言える、男にしても女にしても通用するような見事な顔をしている。彼女はヒルデガント「ゲーニッツ」。ハンナ

四重唱

の不倫相手であり今度の薔薇の騎士においてオクタヴィアンを歌うメゾソプラノである。彼女もまた当代きつてのメゾソプラノでありまたオクタヴィアンの役でもあたり役と評判を取っている。その二人が今向かい合って話をしているのである。

「今度の舞台でそれなのね」

「すみません」

二人は少し俯いて話をしていった。ヒルデガントは申し訳なさそうにハンナに答えていた。

「私には。もう貴女を愛する資格は」

「それはお互い様よ」

ハンナは俯いたままそう述べる。別にヒルデガントを責めるわけではなかった。

「家庭もあつて。しかも女どうしだし」

「それはそうですが」

「だから。同じなのよ」

そう言つてヒルデガントを慰める。

「私も。もう」

「もう?」

「続けられなくなってきたのよ」

寂しげな笑みを浮かべての言葉だった。

「もう。これ以上は」

「周りの声が気になつてでしょうか」

「それもあるわ」

彼女はそれを認めた。

「けれどね。それ以上に」

「はい」

「私は今も主人が好きで。貴女も」

「私もそれは同じです」

ヒルデガントもまた家庭を持っている。ピアノ演奏家の夫に娘もいる。だが彼女はレズビアンでもありだからこそハンナとの愛を育

四重唱

んでいたのである。ハンナはそのことで彼女について気付いたことがあったのである。

第四章

「貴女のごことは今でも愛しています。しかし」

「あの娘ね」

そうヒルデガントに述べた。

「わかっているわ」

「すみません。隠すつもりはなかったのですが」

「だから。いいのよ」

またヒルデガントを慰めた。

「お互い。そもそもが許されないことだから」

「お互いに」

「私も貴女も。許されない愛を育んできて」

「それでも一緒にいて」

ヒルデガントは言う。

「私はもう。その愛に疲れたの」

「私が至らないばかりに」

「いえ、違うの」

そうではないと言うのだった。これは事実であった。

「世間の言葉もあつたし。主人への愛もあるし。それに」

「それに？」

「もう。秋を感じだしたのよ」

静かな言葉だった。だがそこに含まれているものはあまりにも寂

しく、そして悲しいものであつた。

「秋、ですか」

「そう言うと同じよね」

ハンナはその寂しさを悲しさをそのままにヒルデガントに述べた。

「元帥夫人と。全くね」

「ええ」

元帥夫人はマルシャリンのことである。日本ではこの二つの名で

呼ばれる役なのである。正式名称はやたらめったら長いのは貴族だからである。

「そうしたところも。だからもう」

「終わりにされるのですか」

「丁度いいと思うわ」

ハンナは告げた。

「もうね。時間なのよ」

「終わる時間ですか」

「夢は何時か醒めるもの」

ハンナの言葉は寂しい響きを持っていた。それと共に達観もあった。その二つの色を併せ持つ言葉でヒルデガントに告げる。それはヒルデガントの心にも響くものであった。

「そうよね」

「ええ」

そしてヒルデガントもそれに頷くのがあった。頷くしかなかった。

「私は。貴女から離れて」

「新しい愛に生きるというわ」

優しい声になっていた。全てを包み込むような。

「私は。それで」

「貴女の居場所に帰られるのですね」

「もうね。同じになってしまったの」

ハンナはまたヒルデガントに言うのだった。

「あの元帥夫人と同じに」

「同じなのですか」

「そうなの。本当に時計も止めてしまう時があるわ」

顔に秋が深まっていく。ウィーンは秋ではないのに彼女だけが秋になっていた。それも終わりがかけの、寒く寂しい秋であった。

「家の中の時計という時計をね。止めても仕方ないのね」

「それはやっぱり」

「それも彼女と同じなの」

元帥夫人と同じだというのだった。

「老いていくのが怖い。愛を感じられなくなるのが」
「愛をですか」

「老いていくと心も変わるのよ」

哀しい達観の色が今度は彼女の心を支配したのだった。それがまた声と顔にも出て彼女を覆ってしまふのだった。そして彼女はそれを拒むことがない。受け入れるだけであった。

「愛を感じなくなっていくのよ」
「まさか」

ヒルデガントはそれを否定しよとする。しかしハンナはその彼女にまた告げる。

「それはね。まだ若いから」
「若いから」

「貴女もオクタヴィアンもまだ若いからなのよ」

薔薇の騎士の主役の一人である。メゾソプラノが歌う役であり役のうえでは少年となっている。だが演じるのは女であるからそれが不倫相手となっている元帥夫人との間にえも言われぬ妖しい愛の絵を映し出させているのである。

「それがわからないのは」

「そうでしょうか」

「そうよ。だから私は」

さらに俯いて。言葉を出す。

「もうこれで」

「終わりにされるんですか」

「最後の舞台で。終わりにしましょう」

舞台上に生きる人間として言う。自分達の役になりきっていた。

「いいかしら、それで」

「……はい」

ヒルデガントもまた沈痛な声と顔であったが頷いた。やはりここでもそうするしかなかったのだった。彼女も辛かったがそれ以上に

ハンナの辛さがわかっていたからだ。想い人を粗末にできるようなヒルデガントではなかったからだ。た。

「それで。終わりにしましょう」

「けれど今夜はね」

そのうえでハンナは言うのだった。

「二人で。いいかしら」

「はい」

ヒルデガントはその申し出を受けた。受け入れたのだった。

「御願います、それで」

「有り難う」

ハンナは彼女に礼を述べた。そうしてゆっくりと席を立ち上がるのであった。

「行きましょう」

「こうして二人で夜を過ごすのも。あと僅かですね」

「そうですね。あと少し」

ハンナはその言葉にまた顔を俯けさせた。

「あと少しだけね。けれども」

「ええ。それでも」

ヒルデガントも立った。そうしてハンナの横に来た。こうして見れば美青年と貴婦人のカップルに見える。しかしそうではないのはやはり舞台での二人と同じであった。

「一緒に過ごしましょう」

「その僅かな時間を」

二人はそのまま部屋に消えた。そうして朝まで同じ時間を過ごした。その朝は夜での話の時と同じであった。あのココアをまた向かい合って飲んでいたのであった。

「これも同じですね」

「そうですね」

ハンナはヒルデガントの言葉に頷いた。二人はホテルの白く気品のある部屋の中で白いテーブルに座っている。ハンナはネグリジェ

でありヒルデガントはガウンである。それぞれ同じ白い色であったが着ているものが違っていたのだった。二人の後ろにはベッドがある。そこは二人の跡で少し乱れたままになっていた。

「これもね」

「舞台でも飲みましたね」

ヒルデガントはそのココアを右手に持って呟く。寂しげな笑みで。

「このココアを」

「舞台だけじゃなかったわ」

ハナはそう彼女に言葉を返した。

第五章

「何時だって二人きりの時はそうだったわね」

「そうでしたね」

言われてそれに気付くヒルデガントだった。気付くというよりは思い出したのだった。

「何時でも二人の時はこれでした」

「私。最初はココアは好きじゃなかったの」

ハンナもまたそのココアを右手に取った。そうしてヒルデガントに告げる。

「元帥夫人をやるようになってから。それでもね」

「それが変わったのですね」

「そうよ。貴女と一緒にいるようになってから」

ヒルデガントが好きだから彼女の好きなものを飲むようになって。それからだったのだ。そうした意味でハンナにとって思い出深い飲み物になっていたのである。

「好きになったのよ」

「そうだったんですか」

「今だから言えることなの」

「それも今告白するのであった。」

「今だから」

「何もかもが終わろうとする中ですか」

「飲むのは二人の時だけ」

「こつも言う。」

「今は。これからはどうなのかしらね」

「よかつたら。一人で飲んで下さい」

ヒルデガントはハンナに言った。

「私のことを忘れて」

「辛いことを言うわね」

四重唱

その言葉を聞いて。物哀しい苦笑いを浮かべるハンナであった。

「貴女と一緒にだから飲んでいるのに」

「すいません。ですが」

「いいわ。わかっているから」

彼女の心はわかっていた。忘れて欲しいがそれと共に覚えていても欲しい、それはハンナも同じ気持ちだったのだ。だからそんな彼女を怒ることもできなかったのだ。

「私も同じだから」

「そうですね」

「そうですね。未練よね」

またしても陰のある笑みを浮かべる。それが離れられなくなっていった。

「どうしてもね。そうなってしまおうようになったわ」

「私もです」

「お互いね。どうにも」

別れると決めてもそれでも心は動く。その動くのに耐えられなくとも心が動き続ける。それがどうしようもなく辛くて仕方がなかったのだ。

「止められないわね」

「こころした心が。最後まで続くのでしょうか」

「でしょうね。けれど私も貴女ももう決めたから」

「はい」

「ココアを二人で飲むのも終わりにしましょう」

そう告げて最後の一口を飲んだ。甘い筈のココアが苦く、切ない味になっていた。涙の味がする、ハンナは心の中でそう思った。

「もうすぐね」

「もうすぐ何もかもが」

「私達の時間は終わるわ」

寂しい声が何処までも続く。その声で述べるのであった。

「もうすぐね」

「私は私の。貴女は貴女の」

ヒルデガントも寂しい声になっていた。二人の声はそうした意味で同じ響きを持つものになっていた。二人は自分の声とお互いの声を聴いて。また心の中で寂寥を感じてそれに耐えられない辛さを味わうことになるのだった。それはどうしようもなかった。

「時間は続くけれど」

「二人の時間は止まってしまつ」

「永遠にね」

「だから時計を止められたのですね」

ヒルデガントは先程の言葉をまた問うのであった。

「だから。貴女は」

「そうでしょうね」

ハンナもそれを認める。

「だから。時計が動くのが怖いのよ」

「それが今。やっとわかりました」

ヒルデガントも同じ顔になって。答えるのであった。

「私も。時間を止められたら」

「けれど。もうそれは誰にもできはしないから」

「このまま終わりに近付いていくんですね」

「そうね。少しずつ」

少しずつと言つて。また言う言葉はまた二人の心に響く。夕刻の鐘の音そのままに。二人の心に哀しい音色を響かせるのであった。

「終わつていくのだわ」

「それも運命なのですな」

「そうなのでしょうね」

ハンナはまた彼女の言葉に頷くのであった。頷きたくともそれを否定することができないから。だからこそ頷くのであった。そうするしかなく。

「笑顔は作れないけれど」

「それでも」

「今日もね。これで終わりね」

「はい。二人だけの時間は」

「帰りましょう」

そつと立ち上がった彼女に告げた。

「こうしていられるのもほんの少しだけになっていくけれど」

「それでも」

「どうして。人は時間を止めることができないのかしらね」

ハンナは言う。俯いて。真珠を床に零しそうになりながら。紅い絨毯を銀の色を通して見ながらその言葉を言うのだった。

「それが戻すことができればいいのね」

「人だからこそ。それができないのです」

ヒルデガントはテーブルに座ったままである。そこでハンナから顔を背けて言うのだった。

「許されない愛でもいい」

彼女はその姿で言った。

「それが不倫でも愛した人が女の人でも」

「それが薔薇の騎士だから」

「そうです。神はこの作品をシュトラウスに与えられたのはこうした愛が生まれることもわかっていた筈です。けれどそれがこうして」

「はじまりがあるのは必ず終わりがあるもの」

ハンナはまた言うのだった。もう涙が零れそれが紅の絨毯を濡らすばかりであった。ヒルデガントは何とか堪えていた。しかし心は違っていた。

「それだけよ」

「それだけですか」

「そう。それだけ」

言いたくもない言葉を出すだけだった。言葉は自分の本当の気持ちに裏切られて出て来る。ハンナの心はもう散り散りになっているがそれをつなぎ止めることももうできなくなってしまっていたから。そうするだけしかなくなってしまうていたのだ。

第六章

「それだけなのよ。神の前では」

「神は時としてあまりに無慈悲です」

その言葉を受けて。ヒルデガントはその整った中性的な顔を鏡が割れたようにさせながら言葉を出した。言葉の一つ一つが血のよう
に辛い。

「こんな苦しみを私達に与えられるとは」

「けれど。それは一人ではないから」

ハンナは自分の涙をそのままにしてヒルデガントに述べた。

「だから。耐えられるわ」

「でしょうか」

「貴女も私も」

ヒルデガントに対して告げる。

「だから今日は」

「これで二人の時間を終えて」

「それぞれの場所に。帰りましょう」

ヒルデガントに顔を向ける。そうして告げたのだった。

「今日は」

「わかりました」

ヒルデガントも遂に頷いた。彼女が今ここで何をしても時間は進む。それがわかっていているからこそ。頷いたのだった。それしかなかったから。

「これで」

「ええ」

二人は着替えてその部屋を後にした。そうしてそれぞれの家族のところに戻る。ハンナは家に帰る。するとそこには白い髪をした巨人の如き身体の初老の男がいた。身体は巨人の様であったがその顔はギリシア彫刻をそのままゲルマンの雰囲気にしたように細く彫が

あり、そのうえで端整であつた。気品と共に重厚さ、そうして人間味さえ目の奥の光の中にある、不思議な顔をした男だつた。

彼はアンドレアス・リヒター・フォン・ザイフェルトという。ドイツ圏はおるか世界的にも有名なバス歌手の一人でありモーツァルトやワーグナー、このリヒャルト・シュトラウスの作品において第一人者の一人とまで評価されている。とりわけこの薔薇の騎士のオックス男爵を当たり役としており夫婦揃つての共演もまた多い。ハンナと結婚してもう随分経ち互いのことはよいことも悪いことも知つている仲である。

その彼がハンナを出迎えたのだ。彼は妻が家に入ると一言だけ言うのだつた。

「おかえり」

「只今」

「朝食を用意させておいたよ」

彼はその後で妻にそう告げた。

「若しまだだつたら」

「ええ。頂くわ」

妻は微かに笑つて夫の言葉に応えた。夫も彼女の言葉を受けて微かに笑うのであつた。

「そう。それなら」

「うん。だつたら」

そのまま妻を家の中に案内する。オーストリア風の落ち着いていながらも華やかさのある家の中である。言うならば白い豪華さである。それこそがオーストリアの豪華であつた。静かで目立たないよううでいて華やかな。ハプスブルク家の遺産とも言うべき豪華であつた。

その豪華の中を進んで食堂に着く。そこで出されたのはクロワッサンにスクランブルエッグ、そしてハムとソーセージであつた。一見して質素であるが素材が違う。しかも料理法も。これもまたオーストリア風と言うべきであろうか。一見でわからない豪華であつた。

彼女はその豪華を一人で静かに味わっていた。だがそれは向かい側にアンドレアスが来たことで終わったのであった。

「あなたもまだだったの」

「待っていたんだ」

彼は静かな笑みを浮かべて妻に答えた。

「君が帰って来るのをね」

「有り難う。けれど」

ヒルデガントのことはあえて言わずに夫に問うた。

「帰って来なかったらどうするつもりだったの？」

「その時はその時さ」

その静かな笑みでこう答えるのであった。

「最後まで待つて劇場に行く途中で食べるつもりだったよ」

「そうだったの」

「けれど。これで二人で食べられたね」

「そうね」

夫の言葉に対して静かに笑う。穏やかだがそれと共に寂しさも漂う笑みであった。

「もう子供達は行っているわよね」

「もうね。家に残っているのは」

後は二人と使用人達だけである。だがそれで決して寂しくはないのであった。

「家族では私達だけ」

「皆がいるけれどね」

「だから。寂しく思う必要はないのね」

「寂しい朝は。この世で一番辛いものだよ」

アンドレアスはその穏やかな笑みと共にこう述べた。

「この世で一番ね」

「そうかもね。けれど私はあなたにいつもそれを与えてきたわ」
辛い顔で告げる。

「そのこの世で最も辛いものを」

「僕は別にそうは思っていないよ」

だが彼は妻に対して「こう言葉を返した。

「自分がそう思っていない限りはそうはならないものさ」

「そうなの」

「そうさ。けれど君は違う」

ハンナを見て述べる。

「この頃。ずっと辛い気持ちでいるようだけれど」

「知っているのね」

ハンナはクロワツサンを口に入れた後で答えた。アンドレアスはスクランブルエッグを口にしていて。その中で話をしていた。

第七章

「御免なさい。そのことで今まで本当に」

「だから。いいんだよ」

当然だが彼も妻のことは知っている。それも知り過ぎるまでに。

そのうえで彼女を受け入れていたのである。それと共に愛していたのだ。それも深く。

「そのままの君が。好きなんだから」

「ずっと。思っていたことがあるの」

ハンナは夫に言う。朝のコーヒ―はホテルでヒルデガントと共に飲んだココアと同じ苦さがした。不思議なことにココアと同じ味がしたのであった。

「私は。あなたに相應しい女ではないって」

「相應しくない」

「そうではなくて？」

少し目を上げて夫に問う。だがその目は弱々しい光しか出してはいなかった。

「こうして。道を誤っている私だから」

「では聞くよ」

アンドレアスはそんな妻に対して問うてきた。その声は決して咎めるものではなかった。むしろ温かく包み込むものであった。その声はハンナの心にも届いていた。

「元帥夫人。君が次に演じる役だけれど」

「ええ」

言わずと知れた彼女の当たり役である。そしてアンドレアスはオックスを当たり役にしている。これもまた言わずと知れたことである。

「好きかい？彼女は」

「私が？」

「彼女は。好きかな、どうか」
「好きよ」

それがハンナの答えであった。静かな声で答える。
「あんな素晴らしい女性はいないわ。多くの人がそう思うんじゃないかしら」

「そういうことだよ」
それこそがアンドレアスの望んでいた答えであった。彼はその答えを聞いて満足した笑みを浮かべるのであった。

「そういうことなんだよ。だから僕は君を」
「愛しているの？」

「そうさ。誰もが愛する女性が元帥夫人」
思えば不思議な役である。不貞を働いているというのにその心は清らかでありもう人生の秋を感じてそれを哀しんでいるというのに少女の心をまだ持っている。ただ気品がある大人の女ではないのだ。この役には無限の魅力がある。だからこそ誰もが、多くのドイツ系ソプラノがこの役を愛して歌うことを夢見るのである。

「だから僕は君を愛するんだよ」
「私を」

「そうさ。わかってくれたかな」
やはりそのハンナを、彼女の全てを包み込む優しさで言葉を贈るのだった。それは千の紅の薔薇よりも美しく、千の白い百合よりも純粋な言葉であった。その言葉で彼女の心を包み込むのであった。

「だから僕は君を愛しているんだ。元帥夫人をね」
「私はその愛を裏切っても」
「僕は裏切られたとは思っていない」
夫として答える。

「これは君が女の人を好きになつたからじゃないんだ」
「それではないの」
「そうさ」

難しい問題であった。相手が男なら浮気になるが女ならそうは考

えない者もいるのだ。だからこそハンナのスクヤンダルは議論になつてゐるのだ。しかし彼はそれもまた問題にしていないのだった。それは何故か、より大きな者を見ていたからである。

「僕への愛は。裏切られてはいないから」

「あなたへの愛は」

「裏切つたことはないね」

じつと妻を見て問う。

「いつも僕を愛してくれているね」

「ええ」

図々しいと思ひながらも頷くのであつた。彼女自身の心に従つて。

「だからいいんだ。僕はそれで」

「私は。それでも」

「君の愛は一つじゃない」

アンドレアスはまた妻に言う。彼女を包み込みながら。

「その一つが僕に注がれていればそれでいいんだよ」

「そうなの」

「うん」

にこりと笑つてハムを少し切り。それを口の中に入れた。

「それだけでね。僕は満足だよ」

「どうして」

ハンナは夫の言葉を聞いて呟いた。目は泣いてはいないが心では違つていた。

「私には。とても過ぎた方ばかりが私を愛してくれるの」

「それも違うよ」

アンドレアスはハンナのその言葉も否定した。

「そう思うのは。むしろ君に愛される人達さ」

「私に、なのね」

「僕も彼女も」

ヒルデガントのことはあえて名前は出さないが。それでも言った。「それで幸せなんだよ」

「とてもそんな」

「自分を受け入れればいいんだよ」

また優しい声で告げた。

「君自身を。君はとても素晴らしい女性だからね」

「またそんな」

「いや、僕は嘘は言わない」

それでもアンドレアスは言う。じつと自分の妻を見ながら。

「君に対しては。絶対に」

「あなたからはそう見えるのね」

「それは多くの人がそうだと思う」

主観だがそれは事実だと考えていた。言い換えるならばそれが事実だとアンドレアスに思わせるものがハンナにはあるのだった。だがハンナはそれを自分で否定しているだけであった。

第八章

「きつと」

「その私があなただを裏切つても」

「僕はそうは思つていないよ」

また同じ答えであつた。

「だから。それでいいじゃないか」

「有り難う」

また俯いて述べる。夫の言葉が心に滲みるのがわかつた。

「そう言つてもらつて。助かるわ」

「せめてその気持ちは楽になつたかな」

「ええ」

今度は素直に頷いた。首をこくりと縦に動かして。

「何とか。あなたのおかげで」

「じゃあこれを食べて身支度を整えたら行こう」

アンドレアスはこう提案してきた。

「歌劇場にね。そうしたらいい時間だよ」

「そうね。舞台が待っているわ」

ハンナは夫の言葉に静かに応えた。

「だからね」

「うん。それじゃあいいね」

「ええ。今朝は何か気がとても楽になつたわ」

夫とのこれまでの話のおかげであつた。彼女はそのことに心から

感謝していたのだった。

「きつといい歌が歌えるわ」

「それはシーズンまで続くかな」

「続けさせてみせるわ」

彼女はもう歌手としてのハンナ、フォン、リユーゲンバルトになつてた。そのハンナ、フォン、リユーゲンバルトとしての言葉で

あつた。

「きつと」

「そう、その心意気だよ」

アンドレアスもまた歌手としての彼になっていた。夫婦としてよりも歌手同士の、言うならば舞台の上でのパートナー同士となつて話をしていたのでつた。

「それでいいから」

「ええ、そうね」

ハンナはまた歌手として彼の言葉に頷いた。

「今度もまた」

「最高の舞台をね」

こうして二人は歌劇場に向かった。魔物が棲むと言われているウィーン国立歌劇場もその外観は見事なものである。音楽の都と言われているウィーンの象徴の一つでもある。二人は自分達の運転手が操る車の後部座席に二人並んで座っていた。そうしてウィーンの何もかもが白い街並みを眺めながら歌劇場へ向かうのだった。

その途中で二人はあるものを見た。それはゼウスの像である。ギリシア神話における天空と雷の神である彼はその二つを司ると共に神々の主神でもある。オリンポスに集う神々の長でもあるのだ。

ウィーンにあるゼウスは他のゼウスとは少し違う。それは何かと違うと顔である。

この街のゼウスの顔は彫が深く高い鼻を持ち頬髯と口髭がつながっている。この顔はオーストリアハングリー帝国の主であつたフランツヨーゼフ帝のものである。ハプスブルク家の中でもとりわけ有名な君主の一人であり美貌の帝妃エリザベートや悲劇の皇太子ルドルフとのことでも知られる彼はこの帝国の象徴であつたのだ。ゼウスが彼の顔になつているのはそれを表わしているのである。二人は今その皇帝であるゼウスを見ていた。

「ほら、見て御覧」

アンドレアスがハンナにゼウスを見るように誘う。

「ゼウスが、皇帝陛下が僕達を見守ってくれているよ」

「フランツ」ヨージェフ帝が」

「薔薇の騎士の初演の時の皇帝がね」

丁度第一次世界大戦直前が薔薇の騎士の初演の時である。フランツ」ヨージェフ帝は第一次世界大戦中にこの世を去っている。せめて彼が戦勝終結まで生きていればオーストリア」ハンガリー帝国、そしてハプスブルク家の崩壊はなかっただろうと言われている。彼はそこまで偉大な象徴となっていたからだ。

「演じる頃は」

「偉大な女帝の頃」

ハプスブルク家での女帝と言えばマリア」テレジアを指す。十六人の子の母でありよき妻でありそれと共に英邁で活力溢れる君主であった。オーストリアを建て直し国を守り抜いた偉大な女帝である。フランス革命の悲劇の王妃マリー」アントワネットの母としても有名である。

「その二人が君を見守っているんだ」

「だから安心していいのね」

「今度の舞台は必ず歴史に残るものになる」

奇しくもアンドレアスは大沢と同じことを言った。

「絶対にね」

「それは私の力だというのね」

「そうさ」

彼は迷わずにハンナに告げた。

「君がいるからこそ。絶対にね」

「薔薇の騎士はマルシャリンの存在が大きいわね」

「勿論」

薔薇の騎士の主演はソプラノ二人とメゾソプラノ一人である。その中でもソプラノの一人である元帥夫人の存在が非常に大きいのである。そうした意味でこの作品は完全なプリマ」ドンナオペラであるのだ。

四重唱

「君がいるから。僕は安心してこの舞台に向かえる」

「私のマルシャリンだからこそ」

「当然僕も今まで以上の舞台を見せる」

彼にも自信があつた。やはり当代きつてのドイツ系バスとしての
自負があるのだ。

第九章

「だから。絶対に」

「わかったわ。それじゃあ」

彼女はアンドレアスの言葉を受けてまたゼウスの像を見た。そうして言う。

「ゼウス神とハプスブルク家の君主達に誓って」
「最高の舞台を」

そう言い合つて歌劇場に向かう。歌劇場に着くとその壮麗な、宮殿と見紛うばかりの中を進む。白を基調として黒と金で飾られたこの歌劇場はまさにウィーンそのものであった。まるで今にもここにモーツアルトやシュトラウスが出て来るかのようなのである。そんな雰囲気の中を今二人は進んでいた。そうしてすぐに練習や打ち合わせに入るのだった。

そこにはヒルデガントもいた。しかしハンナは今はマルシャリンになっていた。彼女に対してもその顔で接している。誰もが彼女達のことを知っているがあえて言わない。舞台のことに千年していたのである。

「それでね。ここは」

そこには当然ながら大沢もいた。大きな身振り手振りを交えてハンナ達に説明していた。

「こうして。それで」

「ここはこうですね」

ここで若い女の歌手が話に入つて来た。小柄で金髪をショートに切り揃えている。あどけない青い瞳が実に奇麗でその服も少女めいたものであった。

「それでこうで」

「そうそう、その通りだよ」

大沢は笑顔で彼女に応えた。そうして彼女の名も呼んだ。

「フロイラインローゼンベリー、お見事」

「有り難うございます、マエストロ」

そう大沢に述べて一礼する。マエストロとはイタリア語で師匠という意味である。クラシックの世界では演奏者や指揮者、歌手に敬意を込めてこう言うのである。

今大沢がローゼンベリーと呼んだこの女性もまた今回の舞台の出演者である。名をマゾーラ・ローゼンベリーという。オクタヴィアの妻となる令嬢ゾフィーの役である。ヒルデガントの今の想い人でありハンナにとっては恋人を奪われる形になる人である。実に微妙な関係であると言えた。

だがハンナはそのことを顔には出さない。冷静に舞台のことに熱中するだけであった。そんな彼女に大沢が声をかけてきたのであった。

「フラウリユーゲンベルク」

「はい」

ハンナは大沢の呼びかけに応えた。

「貴女はですね」

「どうすれば宜しいですか？」

「このままで御願います」

彼は丁寧な調子で彼女にこう述べた。

「そのままですか」

「既に貴女はマルシャリンそのものです」

元々大沢は歌手の個性を大事にする歌手である。演奏家達の個性も大事にする。そのうえでそれぞれの個性をまとめあげて最高の演奏にしていく。カルロス・クライバーに匹敵するとも言われている見事な能力の持ち主なのである。

「ですからこのままで」

「わかりました」

ハンナは彼の言葉に頷いた。それで納得したのである。

「それではそのように」

「マルシャリンは言うまでもなくこの作品の柱です」

大沢はこの時舞台だけを見ていたのではなかった。このウィーンという街全体を見ていたのである。薔薇の騎士はウィーンを舞台とし、ウィーンで生まれた作品である。そしてこの国立歌劇場で昔から上演されてきた。かつてナチスはリヒャルト・シュトラウスの作品を上演禁止にしたことがあるがこの作品だけは禁止にすることができなかった。それは何故か、この作品があまりにも素晴らしいからである。ナチスもそれを認めるしかなかったのだ。もっともヒトラーは歌劇に対する素養もかなりのものであったことが知られているが。ただし彼が愛したのはワグナーでありシュトラウスではなかった。それも理由だったのかも知れない。シュトラウスはワグナー的なものの他にモーツァルト的なものを入れ、そうして独自の花を開花させたのだから。

「そのマルシャリンになられている貴女は」

「このままでいいと」

「そうです。そしてそれはですね」

大沢は今度はヒルデガントに顔を向けるのであった。

「貴女ですが」

「私はどうすれば」

「貴女についても言うことはありません」

彼はヒルデガントにもこう述べた。

「そのまま御願います」

「私の思うままにですか」

「はい。私もこれまで多くのカンカンを見してきました」

カンカンというのはオクタヴィアンの仇名である。元帥夫人が彼をこう呼ぶのである。マルシャリンとカンカン、そしてゾフィーがこの作品の三本の柱となっているのだ。

「ですが貴女はカンカンそのものです」

「私ですか」

「そうです。ですから貴女もそのままです」

「わかりました。それでは」

ヒルデガントも頷いた。大沢はまずはこの二人に対して感嘆の言葉を漏らすのであった。

「これはどうやら。最高の薔薇の騎士になることが約束されましたね」

「随分と自信がおりなのですな」

アンドレアスは彼のその感嘆の言葉を聞いてこう言葉を返した。

「まだリハーサルもはじまっていないのに」

「全ては貴方達のおかげです」

大沢はそのアンドレアスに対しても言うのであった。その感嘆を。

「ですからここは」

「おいおい、これはまた」

一緒にその場にいたバジーニが彼のあまりもの感嘆の言葉に思わず苦笑いを浮かべるのであった。

第十章

「言い過ぎじゃないのか、ちよつと」

「いや、僕は決してそうは思わない」

しかし大沢はそうバジーニにも告げる。

「これは本当にいけるよ」

「カラヤンやクライバーを超えられるか」

「うん、絶対にね」

大沢は強い言葉で断言した。

「フロイライン」

「はい」

そう話したうえでまたマゾーラに声をかける。彼女はすぐに応えてきた。

「貴女ですよ。理想のゾフィーです」

「有り難うございます」

「私が言うことは特にありません」

彼はこうまで言い切ってきた。

「後はそのまま練習をされればいいです」

「左様ですか」

「これはオーケストラにも言えます」

彼は今は楽譜を見ているだけのオーケストラの面々に顔を向けて述べた。この国立歌劇場にいるだけのオーケストラの面々に顔を向けてのがわかる。しかしそれでも念入りな打ち合わせと研究、練習が重要な程この作品は重要なものがあるだ。シュトラウスの魔力は彼等にそれを強いるのである。

「貴方達もこのまま練習をされて下さい。もうシュトラウスがここにいますから」

「シュトラウスがですか」

「その通りです」

今度は作曲家自身も出された。生み出した親が。

「そしてホフマンスタールが」

「ホフマンスタールも」

この作品の脚本を書いた人物である。ドイツ語圏においては文豪と言われシュトラウスと二人で数々の名作を生み出している。お互いを信頼し合い、互いになくはならない関係とさえなっていたのである。

「ここにいます。彼等が見えませんか？」

「はあ」

皆大沢のその言葉に息を飲む。かなり神がかっているように見えたのだ。

「そうして笑顔で頷いています。ですから」

「このままで行けばいいと」

「今を忘れないで」

彼はこうも言う。

「そして」

「そして？」

「この薔薇の騎士がどういう作品なのか。御存知ですね」

「はい」

誰もがその言葉に答えることができた。だからこそ大沢も安心してこの問いを出したのであるが。

「この作品は」

「誰も死にません」

オーケストラの中の初老の男が答えた。彼はバイオリンであった。

「しかし」

「そう、しかし」

「少しずつ何かが死んでいく」

彼はそう述べたのだった。

「そうした作品でしたね」

「そう、その通りです」

大沢の待ち望んでいた答えであった。彼はその言葉に満足した顔で頷くのであった。

「そう、この作品は本当に誰も死にません」

「はい」

悲劇であるが誰も死にはしないとされている。変わった悲劇でもあるのだ。

「しかし。少しずつですが」

語る大沢の顔が哀しげなものになる。本当に何かを失うことを哀しむ顔であった。

「何かが死んでいきます。その何かは」

「わかっていきます」

またそのバイオリンの演奏者が答えた。

「ですから。だからこそですね」

「はい。私はもう何も言うことはありません」

その言葉を受けて大沢はまた皆に告げた。

「皆さんがわかっておられるからこそ」

「そうですね。それでは」

「一日一日。練習を詰まれて下さい」

彼が言う言葉はそれだけであった。

「それを重ね重ね御願います」

「はい」

「だからこそ」

彼等と同じものを見て同じものを目指すのであった。その中にも同じものがあるからこそ。そうした意味で彼等は一つになっていたのであった。これが大沢の狙いであった。

練習が終わってから自宅に帰り。ハンナは安楽椅子に座って静かに考えていた。考えることは舞台についてであった。それ以外にはなかった。

「誰も死なないけれど」

大沢のその言葉を呟く。静かに。

「けれど少しずつ何か死んでいく」
「そうだね」

彼女のその言葉にアンドレアスが頷いてきた。見れば彼は彼女のすぐ側にいた。そうしてそこで温かいコーヒーを飲んでいたのであった。

「深い言葉だね」

「その何かは決して一つではないわ」

彼女だけでなく皆がわかっていた。それをあえて呟くのである。

「一つではない」

「じゃあそれは何か言えるね」

「ええ」

夫の言葉に頷いてみせた。

「まずは時間」

「そう、まずはそれだね」

「元帥夫人の時間ね。若さが」

「だから彼女は時計を止めるんだ」

そう言われている。彼女は自分の時を死なせたくはなかったのだ。だからこそ一見して無駄な行動を取っていたのである。そこにあるのは哀しみである。

「どうしてもそれから逃れたくて」

「ええ、そうね」

「そして」

アンドレアスはまた妻に、マルシャリンに問う。

「他には」

「オーストリアが」

彼等の祖国でもあるがここでは舞台となっている国として出された。

第十一章

「死んでいくのね」

「そう。薔薇の騎士の初演は一次大戦間近」

同時にハプスブルク家の崩壊間近である。第一次世界大戦により

この古く美しい帝国は呆気なく最期を迎えることになったのだから。

「オーストリアがなくなる時間でもある」

「それまでの繁栄が」

「なくなることもあつたんだ」

「つまり私達の柱となるものが」

なくなろうとしていたのである。つまり国もまた少しずつ死んでいく。それもまた表わされていたのである。滅びゆくオーストリア

「ハンガリー帝国もそこにはあつたのだ。」

「死んでいくこともある」

「支えがね」

「なくなつていつていたんだ」

「こうハンナに告げてみせたのであつた。」

「それも少しずつね」

「そう。そうして」

「次になくなつていくものは」

彼はまたしてもマルシャリンに尋ねた。

「何かな」

「恋よ」

ハンナの言葉は。自分と重なつてこれまで以上に哀しみを帯びたものとなつていた。

「それがなくなつて。死んでいくの」

「そう、恋が」

「元帥夫人はそれから逃れたかつた」

彼女は恋をしていたかつた。だがそれから離れざるを得なかつた

のだ。少しずつ死んでいきなくなっていく自分の時を感じながら。それを受け入れるしかなかったのだ。

「それを受け入れた時が終わりだったわね」

「そうだね。それが薔薇の騎士の終わり」

「全てを達観したその時が」

ハンナは安楽椅子の上で前を虚ろに見て。呟くように言葉を出していた。

「全ての終わりだったのよ」

「けれど。この作品は本当に死んでいくんだね」

「人生が終わっていくもの。秋の話なのよ」

そうなるのだ。しかも晩秋の話だ。人生の秋を感じてその中に身を置く元帥夫人の。その話なのである。

「死んでいくのは元帥夫人の時間と恋」

「それを哀しみと共に受け入れる」

「最初はこんなこと気付かなかったのよ」

語るハンナの顔がこれまで以上に哀しいものとなる。今彼女も同じものを胸に抱いているからだ。そう出ないと心からわからないものであるから。

「それでも。今は」

「わかったんだね」

「皆そうだけれど」

他の皆もこのことをわかっていることは知っている。だがハンナは。それを他ならない自分のこととして受け止めているのであった。そこが大きく違っていったのだ。

「それでも私は」

「けれど」

アンドレアスは優しい声をハンナにかけてきた。そつと彼女の近くに来て。

「何？」

「元帥夫人はそれを乗り越えたよ」

「ええ」

夫のその言葉にこくりと頷いた。

「そうね。それを一人で受け止めて」

「誰でも。秋が来る」

人生とはそうしたものだ。春があれば秋がある。それは誰も変えられないものではないのだ。例え時計を止めても。それでも時は動くものなのだから。

「仕方ないことなんだ」

「私も同じなのね」

ハンナはそのことをまた噛み締めた。

「彼女と」

「そうさ。君は元帥夫人なんだ」

そのことを妻に対して告げた。

「元帥夫人になって今度の舞台を」

「わかっているわ」

今度の言葉は。それまでのものよりは幾分は強いものになっていた。顔も少しだが上がっていた。

「私は。歌えるわ」

「そうだね」

ハンナのその言葉を受けて静かに微笑む。

「君はきつと」

「どんな心でも」

ハンナはこうも述べた。

「私はきつと」

「だからだよ」

彼はまたそこを言う。

「そんな君だからこそ」

「私だからなの」

「そうじゃなかったら僕は今ここにはいないよ」

アンドレアスの言葉は何処までも優しい。その優しさでハンナを

包もつとしているようだった。

「そうじゃないかい？」

「私の歌は。そうしたものなのね」

「君はマルシャリンを演じて歌う為に今ここにいる」

「こつも述べてきた。」

「少なくとも今は。マルシャリン以外の何者でもないよ」

「そうだったら私はこのシーズン、何があっても歌うわ」

今それを心に誓うのだった。

「何があってもね」

「その意気だよ。そうしてね」

「ええ」

また夫の言葉に頷いた。

「最高の舞台にするわ」

「最高の薔薇の騎士を頼むよ」

「わかったわ」

（そして）

夫に伝えると共に心の中でまた誓う。その誓いは彼女にとっては誓わなくてはならないものであった。哀しみと共にある誓いであった。

（全てを終わらせるわ）

そう誓うのだった。自分自身に対して。彼女は今自分の全てをそこに捧げようともしていたのだった。

第十二章

「少なくとも今は。マルシャリン以外の何者でもないよ」

「そうだったら私はこのシーズン、何があっても歌うわ」
今それを心に誓うのだった。

「何があってもね」

「その意気だよ。そうしてね」

「ええ」

また夫の言葉に頷いた。

「最高の舞台にするわ」

「最高の薔薇の騎士を頼むよ」

「わかったわ」

（そして）

夫に応えると共に心の中でまた誓う。その誓いは彼女にとっては誓わなくてはならないものであった。哀しみと共にある誓いであった。

（全てを終わらせるわ）

そう誓うのだった。自分自身に対して。彼女は今自分の全てをそこに捧げようともしていたのだった。

ヒルデガントはマゾーラと共にいた。二人でマゾーラの部屋にいた。そこで二人きりで話をしていた。

そこもまた白く落ち着いた部屋だった。テーブルの上に飾られているのは銀で造られた薔薇であった。薔薇の騎士の題名にもなっているこの薔薇は花婿が花嫁に捧げるものである。それを贈り届けるのが薔薇の騎士なのだ。この作品の中ではオクタヴィアンこそが薔薇の騎士なのである。

二人は今その薔薇を見ていた。決して楽しい顔ではない。むしろ哀しい顔だ。その顔で二人で白銀の薔薇を見詰めているのであった。

「この薔薇は貴女が私に届けてくれるものね」
「そうよ」

ヒルデガントはマゾーラの言葉に頷く。その間も表情は変わりはない。

「劇の中でね」
「そして今も」

マゾーラは言った。言いながらその薔薇にそっと触れる。薔薇は冷たく何処までも清らかな輝きをそこに見せているのだった。

「私にくれたのね」
「はい。この薔薇を貴女に」

ヒルデガントは彼女を見て述べる。述べながらもその哀しい顔をそのままにしていた。

「捧げます」
「宜しいのですね」

マゾーラは薔薇を触ったまままた言うのだった。
「私が頂いても」

「どうしてそのようなことを言われるのですか？」
「私が頂いていいようには思えないからです」

見ればマゾーラは薔薇を手に取りうとはしない。ただ振れているだけだ。触れているだけで手の中に収めようとはしないのであった。

「貴女に捧げるものなのに」
「あの方でなくて宜しいのですか？」

ハンナはそう問うてきた。彼女もまたヒルデガントとハンナのこととは知っている。知っているからこそあえて聞くのだ。聞かずにはいられなかった。

「あの方で」

「もう。終わる恋ですから」

それがヒルデガントの返事であった。それを隠すことはしなかったしできもしなかった。
「ですから」

「だからなのですわね」

「はい」

はつきりと彼女に答える。

「そうです。だからこそ」

「だからこそ私にこの薔薇を下さったのですわね」

「なりませんか」

マゾーラに尋ねた。

「それは」

「いえ」

マゾーラはそれを否定する。彼女もまたそれを隠すことができなかったのだ。

「喜んで受け取らせて頂きます」

「有り難うございます」

あらためて礼を述べるヒルデガントであった。そのヒルデガントに対してマゾーラは憤み深い調子でまた述べるのであった。

「私が銀の薔薇を受け取るとは思いませんでした」

「それは何故」

ヒルデガントは今の言葉に顔を向ける。どうしてなのかと顔でも問うていた。

「私は。貴女には相応しくないからです」

「私には」

「いえ」

ここで今の言葉すら否定するのだった。その言葉には憤みよりも悲しみと寂しさが込められていた。そうした言葉で今彼女に告げるのであった。

「私は。誰にとっても相応しくない、そうした女なのです」

「またそれは」

どうしてそこまで自分を否定するのか、ヒルデガントはそこに何かを感じた。問わずにはいられなかったが彼女からそれを言い出したのであった。

「私は。東ドイツに生まれました」

「それは知っていますか」

これはあまりにも有名である。かつての東ドイツが生んだ再考のソプラノ歌手の一人とさえ言われている。今でこそ一つになったドイツだったが戦後長い間東西に分かれていた。その悲しみを覚えている者も少なくなってきた。これもまた歴史であった。

「父は。スパイだったのです」

「スパイ!？」

「はい、演奏家でしたが」

実は彼女の父はバイオリン奏者だったのだ。母はフルートで両親から英才教育を受けた結果が今の彼女だとも言われている。

「スパイでもあったのです」

「それはよくあった話だと言われていますが」

これは本当のことだ。とりわけこのウィーンは東西の勢力が集まり諜報活動が盛んであったと言われている。ハプスブルク家の都は二十世紀にあっても政治の中心であり続けたがそれはこうした意味においてもそうなのであった。音楽と政治はこの街から離れることはないであろうか。

「それで何故そこまで」

「それも唯のスパイではありませんでした」

彼女は沈痛な顔で言葉を続ける。

「同僚の行動を監視する。そうしてそれと共に西側の人間を買収して内通者を作っていく。そうした汚いスパイだったのです」

「所謂秘密警察ですか」

「そうです」

実際に東側で言われていた言葉だがソ連の人間が東ドイツに留学する、それは何故かというところで共産主義や共産主義国家のあり方を学ぶ為だとジョークで言われていたのだ。かつての東ドイツは共産主義の優等生であり東側においてはソ連のまたとない盟友であったのだ。これはナチスが母体になったせいであるが東ドイツの高

官には元ナチスの人物も多かったと言われている。ナチスとソ連の正体が全く同じ全体主義国家であったということは今では常識となつているがそれが嫌になる程巧みに活かされていたのが東ドイツなのであった。従つて秘密警察の類もソ連に匹敵するものがあつただ。

「しかも。嬉々として行っていました」

「仕事としてではなく」

「自らの富の為に」

これも東側ではよくあつた話だと言われている。自らの富や栄達の為にそうした仕事をしていたのだ。これで多大な富を得ていたというのがマゾーラの父であつたのだ。

第十三章

「その仕事を進んでしていたのです」

「つまりそのお父上の血を引かれているから貴女は」

「父は。最低の人間でした」

少なくとも人として褒められたものではないかも知れない。仕事だからやるのでも命じられたからやるのでもないのだから。確信犯であつただから。

「私は子供の頃から自分の家に何でもあるのが不思議でした」

「他の家には何も無いのに」

「はい」

共産主義国家では優等生であつても物資の質は悪かった。だがマゾーラの家は違つていたのだ。

「他の家にはない西側のものがふんだんにあつて」

「それはそうした理由からだつたのですね」

「そうです。しかも父は賄賂を取り」

これは何処にでもある話だ。よいか悪いかは別にして。悪いと言えは悪い話になるものであるが。

「時には弱みを握つてそれを要求していました」

「秘密警察ではよくあることでは？」

「だからこそです。父はそれを笑顔でしていたのです」

「それが許せませんか」

「はい。その父ももう」

実は彼女の父親はもうこの世の者ではない。東西ドイツ統一後ある若い女性と一緒に乗っていた車が事故を起こし亡くなっているのだ。その女性は妻ではないことは言うまでもない。

色々と奇怪な事件であり車に細工がしてあつたとも言われているがそれが誰の仕業かはマゾーラも母も知らないことである。

「この世にはいませんが」

「それでも許せませんか」

「私自身も」

マゾーラは言う。

「それをずっと知らずに父を尊敬し、その贅沢の中に身を浸していたのですから」

「他の人達を苦しめ、売って、脅して手に入れた贅沢で」

「そうです。私の全てはその忌まわしい贅沢で穢れています」

そう自分を定義付けるのだった。

「そんな私が。どうして誰かに愛されるなどと」

「フロイライン」

ヒルデガントはそうして自分を卑下するマゾーラに対して声をかけた。これまでになく優しい言葉で。

「はい」

「人は。誰でも同じなのです」

そう彼女に語りはじめた。

「同じ。それは」

「御聞き下さい」

また彼女に言った。拒もうとする彼女に対して。

「貴女は今はお父上のそうしたことを許せませんか」

「絶対に」

それはすぐに出た。許せる筈がなかった。

「どうして。そんなことが」

「そのお父上はどんなお父上でしたか？」

「えっ!？」

今のヒルデガントの言葉に思わず顔を上げた。そうして彼女の顔を見たのであった。

「どんなお父上でしたか。お話下さい」

「少なくとも私の前では優しい父でした」

言われるままに答えた。それも正直に。

「一度も厳しいことを言ったことなく。私が泣いていたら慰めてく

れて」

「とても心優しい方だったのですね」

「他人を散々欺いて陥れてきましたか」

「そうは言っても。自分に対しての優しい顔も思い出すのだった。

「それでも。私には」

「そういうことです。人は皆同じなのです」

「同じですか」

「そうです」

そこでまた言うのだった。

「人には誰もが清らかな顔と醜い顔があります」

「二つの顔が」

「貴女のお父上は確かに人として許されぬ罪を犯しました」

それは事実だ。彼女も否定できない。

「ですが。それと共に優しいお父上でした」

「その二つで相殺されると仰りたいのですか？それは」

「いえ、そうは申しません」

ヒルデガントはそれは否定した。

「それは貴女も同じだということですよ」

「私も、ですか」

「そうです。貴女が忌み嫌うそのお父上の血が醜いものとするならば」

あえてそれを出してから。また言う。

「貴女が本来持たれているその純粋な性格、それは清らかなものです」

「それをどうされるのですか？」

「私はそれを愛します」

彼女は言った。

「私をですか」

「そう、貴女の本来持たれているものを。それを愛するのです」

「私にそんなものは」

「御自身では気付かれないものです」

また穏やかな声で彼女に述べるのであった。

「清らかなものには。醜いものには気付いても」

「そうなのでしょうか」

「自分では中々わかりません。しかし他人から見れば違います」

「では私は」

「貴女のお父上のことはわかりました」

それも受け止めるのであった。本来は彼女のものではないと思いつつも彼女のものとして。彼女がそれを望んでいるのであるから。

「ですがそれもまた受け取らせて頂けませんか」

「それもですか」

「そうです」

「それもまた受け止めると言うのだった。

「是非共」

「それでも。宜しいですね」

「ええ」

「また頷く。

「私は。そうして貴女と共にいたいです」

「本当に私で」

「また同じことを言ったが今度のは先の言葉とは少し言葉のニュア

ンスが違っていた。それもまた意味があったのをヒルデガントは感

じていた。

第十四章

「宜しいのですか？」

「貴方が仰りたいことは先程のものとは別ですね」

「はい」

マゾーラ自身もそれを認めて頷いた。

「その通りです」

「私があの方と共に長い時間を過ごしたのは事実です」

彼女が答えたのはハンナのことに他ならない。

「それも今まで」

「これからは？」

マゾーラは顔を上げて彼女に問うた。悲痛なまでに綺麗な声で。

「これからはどうなのでしょう」

「これからですか」

「はい、貴女はこれからは」

「私とあの方の恋は終わりました」

ヒルデガントは静かに述べるのであった。

「舞台と同じで。そのまま」

「マルシャリンとオクタヴィアンのように」

「そうですね、そのままです」

また述べるのだった。

「終わろうとしています。いえ、今終わりだしています」

「終わりだしている」

「そう、舞台と同じように」

また舞台を出す。

「終わろうとしています。あの方とも」

「では私とは」

「今はじまっています」

こう述べるのであった。

四重唱

「そう考えていますが」

「左様ですか」

「それではいけませんか？」

ここまで話したうえであらためて彼女に問うのであった。

「貴女を愛することは」

「不思議な気持ちです」

これがマゾーラの返答であった。

「不思議な気持ちですか」

「はい、ゾフィーと同じ気持ちです」

そうヒルデガントに述べるのであった。

「私はあの方に対して複雑な感情を抱きはじめています」

「それはやはり」

「はい」

また彼女に対して答えた。

「敬遠に跪きたいですし。同時に」

「ひっぱたいてもやりたい」

「本当にこんな気持ちになったのははじめてです」

最後の三重唱そのままの言葉であった。

「こんな気持ちになるなんて。本当に」

「そうですね」

それはヒルデガントも同じであった。だからこそわかる。

「私も。オクタヴィアンになろうとしています」

「それは」

「いえ、本当です」

そうマゾーラに告げた。

「オクタヴィアンは不思議です。男である筈なのに」

「演じるのは女」

「だからでしょうか。私は彼が男には見えないのです」

この不思議な役はシュトラウスがこの作品を作るにあたりモーツァルトのフィガロの結婚を参考にしたからである。フィガロの結婚

四重唱

にはケルビーノという美少年が登場するが彼を演じるのは女性である。メゾソプラノの役である。オクタヴィアンもまたメゾソプラノの役だ。これはシュトラウスが狙ったものなのだ。

「男にはですか」

「はい、どうしても女だと思うのです」

「そうマゾーラに述べたのであった。」

「やはりこれは」

「魔力ですね」

「マゾーラはそう表現したのであった。」

「これは」

「おそらく。シュトラウスの」

「ヒルデガントもその言葉に頷く。」

「魔力なのでしょう。オクタヴィアンを女性だと思えるのは」

「実際に彼は女性ではないのですか？」

「彼を女性と呼ぶ。不思議な言葉になっていた。」

「やはり。ですから貴女もまた」

「そうなのですか」

「ここで彼女も気付いた。」

「そうだからこそ私はオクタヴィアンを女性だと」

「彼女は女装します」

「遂にオクタヴィアンを『彼女』と呼んだマゾーラであった。」

「それは彼女の本来の姿に戻ったということなのでしょう」

「だからこそ私はオクタヴィアンの心がわかる」

「そうなります」

「そう彼女に告げた。」

「そして私もまた」

「私達もまた。同じになっているのですね」

「ヒルデガントは今それを感じたのであった。」

「やはり。そうだからこそ」

「お互い今こうしてここにいる」

「私も。貴女と共にいたくなりました」

ヒルデガントはまた言うのだった。

「オクタヴィアンとゾフィーのように」

「舞台だけではなく」

「そう。私がオクタヴィアンなら」

「私はゾフィー」

もう二人はヒルデガントでありオクタヴィアンになっていてゾフィーでありマゾーラになっていた。そうした二人になっていたのだ。そうした意味での二人であった。

「そうして二人で」

「ずっと」

二人はそれぞれそつと手を出し合いそれが触れ合った。そうして今二人になったのだった。

舞台がはじまった。それは前評判はスキャンダラスであったが実際の舞台は。初演前にはまだ様々な雑音が聞こえていた。

「やはり前評判はかなりスキャンダラスだな」

「気にはしていないよ」

大沢はそうバジー二に答える。今二人は初演前日に最後の打ち合わせを終えて大沢の家で楽しく飲んでいた。赤いワインに様々なチーズがある。シンプルだがそれだけに中々味わいのある組み合わせである。ワインとチーズは神が考えた最高の組み合わせの一つである。

「そんなものはね」

「そうか。やはりな」

「むしろそつちの方がいい」

大胆にもこう述べるのであった。

「最初悪評の方が実際の舞台は映えるものさ」

「それは日本的演出かな」

バジー二はワインを飲みながら楽しそうに問うた。これは冗談と

演出家としての興味の二つがミックスされた言葉であった。

「あえてよいものを悪いものの次に出すというのは」

「いいや」

しかし大沢はそれは否定した。そうしてモツアレラチーズを一口食べるのだった。その独特の弾力が歯に伝わり絶妙な感じである。

味が極めて淡泊なものもい。

「僕の考えさ」

「そうなのか」

「日本的演出だと薔薇の騎士はどうなるかな」

そのうえで不意にこう言うのであった。

「少し考えてみたいな」

「そうだね。それも面白いかも知れない」

バジーニもそれに乗ってきた。言われてみればそれも案外面白そうである。

「モーツァルトでは魔笛に多いけれどな」

「あれは元々日本を意識しているしね」

「そういうことだね」

これは本当のことである。初演での主役達の衣装は日本のものであったのだ。今でも時折日本的な演出が為されることがある。当時の欧州においては日本というのは実に不思議で神秘的な国であると考えられていたのである。このウィーンのシェーンブルン宮殿においても日本の間という部屋も存在している。

第十五章

「どうも薔薇の騎士はウィーンのイメージが強いけれども」

「それも考慮する必要があるか」

バジーニはそれについて考えだした。

「だがそれは今度だ」

「今回はあくまでウィーンに徹して」

「ウィーンとしては最高の薔薇の騎士になるぞ」

その自信はあった。演出家としては。

「今回は」

「僕も最高の指揮を見せるよ」

大沢もその自負はあった。それだけのものが今の彼にはあるのだ。つた。

「カラヤンやクライバーを超えてみせる」

「その意気だ。それじゃあ」

「よし、頑張ろう」

二人の心が一つになった。同時に出されたグラスが打ち合う。こ。うしていよいよ薔薇の騎士の幕が開けるのであった。

初演の日。国立歌劇場には各界の著名人や名士だけでなく多くのマスコミや批評家も集まっていた。彼等にとってもある意味今回の薔薇の騎士は注目するべきだったのだ。

「あの四人が一度に出るか」

「これは見物だぞ」

マスコミ達の目当てはそれであった。ハンナとヒルデガント、アンドレアス、マゾーラについてであった。この四角関係が舞台でどう生きるのか、非常に意地の悪い見方をしようとしていたのである。これに対して批評家達は別のものを期待していた。それは作品の質であった。

「カラヤンもクライバーも超えるか」

四重唱

「果たしてそんなことができるものか」

ウィーンの音楽家やそれに関わる者達は保守的な者達が多いと言われている。そのせいか彼等は事前の大沢の言葉を過剰に意識してここにいるのであった。

彼等は他にも演出や歌手達にも目を向けるつもりであった。全てを見て徹底的に書いてやる、そう意気込む者達もいた。だからこの舞台のチケットがかなり高くてもそれを問題とはしなかったのだ。もっともこれも舞台が悪ければ批判の対象とするつもりだったが。

彼等は幕が開くのを待っていた。既にオーケストラは準備していて幕の向こうではハンナとヒルデガントがいた。今二人は真剣な顔で見詰め合っていた。

「いよいよね」

「はい」

ヒルデガントはハンナの今の言葉に頷いた。既に服は元帥夫人、オクタヴィアンのものであり二人もそれになるうとしていた。

「はじまるわ」

「私達の舞台が」

「これで全てが」

「はじまり。そして」

「終わるのね」

既に元帥夫人になっているのか、ハンナのままなのかわからない。しかし既にその顔は元帥夫人のものになっていた。否、これもハンナのものであるうか。既にそれすらもわからなくなっていた。ハンナは今その中にいたのだった。

ヒルデガントも。彼女もまたオクタヴィアンなのかヒルデガントなのかわからなくなっていた。しかしこれだけは言えた。ハンナも。彼女達はあくまで『彼女達』であった。そうして二人でそこにいたのだった。

「全てが」

「終わりは。全てにあるものですが」

「薔薇の騎士と同じにしましょう」

それがハンナの言葉であった。静かに微笑んでの言葉であった。

「これで」

「はい。それでは」

「はじまりと終わりを」

「歌いましょう」

その言葉が終わって暫くして幕が開いた。いよいよだった。

はじまりの曲からして何かが違うていた。そこにあるのは哀しみであった。既に何かが死にはじめていた。そうした静かな哀しみがもうはじまっていた。

観客達は最初から黙ってしまった。歌劇場は歌と演奏だけが聴こえるあまりにも独特の世界となってしまった。大沢の指揮もオーケストラの演奏も完璧だったがそれ以上に歌手達が圧倒的であった。

「僕の宝！」

「私の坊や！」

二人の二重唱はまだ幸せの中にある。しかしその中でもう元帥夫人は哀しみを帯びている。既に終わりははじまっていて彼女はその中にいたのだ。ハンナもまた。

それは少しずつ高まっていく。その中に誰もが引き込まれそうして。彼等のまた哀しみの中に誘われていくのだった。静かで美しく、それでいていたたまれない哀しみの中に。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

マスコミ達も完全に沈黙してしまった。下劣な品性というものは完璧な美の前には全くの無力なものと化してします。今がそれであった。

第十六章

その沈黙した彼等はただ舞台を見ていた。ハンナ、いや元帥夫人だろうか。彼女の歌声を。その演技を。全てを見てその中に引き込まれていたのだった。

「夢は自分の意志で創り出せるものではないのよ」

この言葉さえも。全てのようだった。今は。

その静かな世界の中でオックス男爵が姿を現わす。彼は完全に元帥夫人に動きを合わせていた。夫婦であるが夫婦でなく。そうして舞台の上になっていたのだった。

「このことは貴女の美しい御手に任せます」

「宜しいですわ」

二人の息は完璧なまでに合っていた。しかしそれだけで舞台が出来る上がるのではない。そこにある美もまた至高のものであるがそうさせているのは他ならぬ二人の歌と演技であった。アンドレアスもまたオックス男爵になっていたのだ。そうして完璧なまでの男爵を見せていた。

「これだよ」

ある批評家が呟いた。

「これがオックスなんだ」

コミカルでありながらそこにはノーブルなものも持っている。それと共に若々しさもある。実はオックス男爵の年齢は三十五歳に設定されている。元帥夫人は三十二歳であるからその設定はかなり若くされているのである。しかも曲がりなりにも男爵は貴族である。その高貴さも出ていたのだ。だからこそ最高のオックス男爵になっていたのだ。

「これがな。これでいい」

満足しながら舞台を見ている。こここれ観客達はあることに気付いた。

「あの男爵は」

「何処か」

女装したオクタヴィアンに言い寄るシーンだ。好色な男爵の人柄を見せる場面であるがここでの演技に彼等はふと気付いたのである。

「何処か気遣っているな」

「そうだよな」

そう言い合うのだ。やはり好色なのだがそれ以上に優しさを感じる。一見して粗野なのであるがそれでもそこに優しさがかいま見えていたのだ。

「あんな男爵は見たことがない」

「優しい男爵か」

彼等はそれに満足していた。そうした男爵に。

「高貴なだけでなく」

「優しさを見せてもいる」

「中々。面白い男爵だ」

そう思うと舞台がさらによくなるのだった。それを見ながらさらに薔薇の騎士の世界の中に入っていく。第一幕のクライマックスであるオクタヴィアンと元帥夫人の二重唱の場面では。女性の中には涙さえ流す者までいた。

「嫌だわ」

「まだ。第一幕なのに」

そうは思っていないでも流れるものは流れる。それを止めることができなかつたのだ。

「どうしてこんなに哀しいの？」

「何度も観た薔薇の騎士なのに」

「これは。ただの薔薇の騎士じゃない」

出た結論はこれであった。

「これまでになく薔薇の騎士だ」

「これまでになく」

「ああ、そうだ」

そう言う者がいた。

「これだけの薔薇の騎士はない。あの元帥夫人は」
ハンナを見て。この言葉が出た。

「演じられている元帥夫人じゃない。元帥夫人そのものだ」

「そのものなのか」

「だからこんなに」

「そして。あの時のウィーンだ」

あの時の、と言われた。それは果たして何時のウィーンなのか。

舞台のうえでウィーンなのか、それとも初演された時のウィーンであるのか。それは言った者にすらわからないものであった。だがあえてこう言うのであった。

「今あそこにあるのは」

「彼女達もあの彼女達なのね」

「ああ」

誰かがまた誰かの言葉に頷いた。もう彼等、彼女達は今の舞台から離れられなかった。

「元帥夫人がいる」

「今ここに」

第一幕が終わろうとしていた。黒人の男の子に白銀の薔薇を持って行かせる。その時においてさえ。何かが死んでいったのを誰もが感じたのだった。

「死んでいく」

「また何かが」

「けれどそれが何かは」

「もう言えない」

言えなくなっていた。ただ彼等ができることは。舞台を観ることだけだった。第一幕の後の挨拶も終わり第二幕になって。男爵とオクタヴィアンの争いにも皆何かを感じていたのだった。

第十七章

「貴方が少し色目を使っても文句は言いませんぞ」

「あの男と結婚されるのですか!？」

オクタヴィアンは粗野な男爵の言葉を聞いてゾフィーに問うている。粗野で下品なオックスと優雅でそれでいて清廉なオクタヴィアンの対比となる場である。それと共に醜男と美男と。光と影の如き対比がはつきりとなる場である。しかしそれもまた今日の舞台では違っていたのだった。

やはり男爵は優雅だ。そうしてあえてゾフィーをオクタヴィアンのところにやるように。そう仕向けているふしがあった。それはオクタヴィアンであるヒルデガントも感じていた。

(この人もまた)

アンドレアスである男爵を見て心の中で呟く。

(あの人と同じで)

「この狡猾な若者を笑わずにはいられぬな」

「この方は貴方が嫌いなのです」

「心配するな。そのうちに好きになる」

この言葉は。ゾフィーに言ったものではなかった。それがわかるのはそこにいたオクタヴィアンとゾフィー、そして舞台の外にいる元帥夫人だけであった。そうした言葉だった。

「あの人も」

元帥夫人であるハンナはそれを聞いて言うのだった。

「あの二人を。一緒にさせようと」

それがわかった。今夫の、男爵の心が。

「そんなことをしては花嫁に対して侮辱になる」

「貴方は何という」

オクタヴィアンはその言葉を受けて歌う。しかしここでも微妙な感じであった。

「鈍感な人なんだ」

これは男爵に対してではなく。自分自身への言葉になっていた。

「仕様がなければ今すぐにでも教えてあげよう」

自分自身に対して言う。責めていた。そうして男爵と斬り合いになるがここでも。彼はあえて斬られるのだった。

「見事だな」

「ええ」

観客達はその芝居を見て見事と言う。しかしそれだけではないのは舞台ではわかる。そこが観客と舞台の違いであったがそこまでは観客も流石にわかりはしなかった。

舞台は完全なまま続く。既にマスコミも批評家達もその評価を決定させていた。

「最高の舞台だ」

「何もかもが完璧だ」

口々にこう言い合うのだった。第二幕が終わり休憩の間になっていた。殆ど誰も席を立つことはない。第二幕の余韻と第三幕への期待の中に身を置いているのであった。

「いよいよ最後だが」

「ここで上手くいくかどうかだが」

「必ず上手くいく」

それはもう予定事項であった。それはもうわかっていたのだ。

「何があるとな」

「ああ。問題はそれがどういった最高かだ」

そこであった。最高といっても幾つもあるものなのだから。

「それはこれからわかるな」

「最後の幕が開いた時に」

それはもうすぐだった。しかし今はそのもうすぐがどうしようもなく長く感じる。それは彼等が期待している何よりの証拠であった。舞台に対して。

「さあ、今だ」

「開いたぞ」

幕が開いた。遂に最後の舞台であった。

「ここからだな」

「肝心なのはか？」

「ああ、そうだ」

こう言う者もそこにはいた。彼等の中には最後までそ肝心だと言う者もいたのであった。

「ここだな」

「どうなるかか」

それぞれの目で視線を集中させる。そうして最後の舞台を見るのであった。

最後まで歌手達は演じている役そのままであった。華麗なだけでなくそこには魂さえもあつた。その心で歌い続け演じ続けている。

オックス男爵が恥をかいて舞台を消す場面になつていた。ここでは男爵の格好悪さがとりわけ強調される演出が多いが今回はかなり違つていた。

「全ては終わりました」

元帥夫人が彼に言葉を告げる。そうして男爵はそれを受けると。

「ロイポールド」

彼の従者に声をかけるのだった。優雅な物腰で。

「行くでしょう」

多くの者に取り囲まれあれこれと言われながらであるがそれでも悠然かつ優雅に姿を消す。その去り際はオックス男爵ではなくフィガロの結婚のアルマヴィーヴァ伯爵ではないかと思える程だ。実はオックス男爵のモデルはこの伯爵である。確かに好色なのであるが優雅で気品があり堂々とした人物だ。何しろフィガロの結婚で出て来る登場人物の殆どを向こうに回す事態になつてもまだ威風堂々としており貴族然としているのだ。ディートリッヒフィッシャー・デイスカウの圧倒的な名唱を代表として多くのドイツ系バリトン歌手がこの役で大当たりを取っていることからわかるようにこの伯

爵は単なる敵役ではないのである。実に見事な主役の一人なのだ。これはオックス男爵に言えることでもある。今アンドレアスはオックス男爵となりそれを観客達に見せきつた。彼が舞台を去る時に拍手すら起こっていた。

第十八章

「まさかな」

それを見て批評家の一人が思わず唖った。

「ここまでとはな。彼が見事な歌手だとは思っていたが」

それ以上というのであった。そう評価させるものがそこには確かにあった。

最後の場面。元帥夫人とオクタヴィアン、ゾフィーの三重唱の場面になつて来た。この作品で最後の見せ場の一つだ。この名作の。

「さあ早くお行きなさい」

元帥夫人はそうオクタヴィアンに告げる。

「そしてあなたの心の為さりたいことをされるのです」

「テレーズ、一体どういふ」

つもりなのですかと聞こうとすれば。ハンナは言うのだった。

「今は出て行きあの人の御機嫌を劣りなさい」

「誓つて言いますが」

ヒルデガントはわかつていた。この場面で全てが終わるといふことを。わかつていたがそれと共にそれから逃れることができないのもわかつていた。何もかもがわかつていたのだ。

「今はそんなことはいいのよ」

「何を考えておられるのか僕にはわからない」

(いえ)

ヒルデガントはオクタヴィアンの心がわかつていた。そして元帥夫人の心も。じつとハンナを見詰めていた。しかしハンナは彼女から視線を外し。全ては終わったのだった。

「あの方の所へいらっしやい」

「では」

それを受けてゾフィーに顔を向ける。三重唱の後で元帥夫人に向かおうとするが戸惑う。ハンナはそんな彼に穏やかに歌う。彼女が

ら視線を外しながら。もうそれを合わせることはなく視線を外したままであった。

「どうしてそんなに困った様子で中に立っているのかしら」

「御願いですからここにいて下さい」

（けれどそれは）

適わないのだ。ヒルデガントにはわかっていた。

（ではしない、これで）

「何か仰いましたか？」

「そんなに早くあの方を愛するようになられたのですか？」

元帥夫人の言葉でありハンナの言葉でもあった。

「何故そのような質問を」

今度はマゾーラがハンナに問うた。

「私もわからない、全くわからないこと」

ハンナは舞台を後にしようとする。ヒルデガントは自然に出て行くこととしたがそれは自分の意志で踏み止まった。それと全く同じ瞬間にハンナは彼女に舞台上に留まるように示す。これには二人とマゾーラ以外誰も気付きはしなかった。

最後の三重唱の後で元帥夫人はそつと姿を消し後には二人だけが残った。二人は互いに見詰め合っている。最後はその愛を確かめ合うだけであった。

「私の心から他の全てのことは夢の様に消えていく」

「私達が永遠にこうして一緒にいられるのは」

二人は固く抱き合っていた。もうヒルデガントはハンナを見てはいない。マゾーラを見ているだけだ。もう彼女の心はそこに完全にあったのだった。

「貴女だけを感じている」

二人の最後の二重唱が終わり固く抱き合う。舞台の裏ではもう一組堅く抱き合っていた。それはハンナとアンドレアスであった。

「有り難う……」

「うん」

彼はハンナを優しく抱き締めていた。何も語らずに優しく抱き締めただけだった。だがそれこそが今のハンナに必要なものであった。だからこそであった。

二組のカップルが抱き合いそうしてその中で何かが完全に死んで戻らなくなってしまうた。この舞台は薔薇の騎士の一つの歴史となつた。しかしそれを知る者もそこにあつた四重唱のことは知らないのであつた。それは彼女達だけが知っているものであつた。それだけのことだつたが何かが完全に死んで静かに眠つた。それだけだつた。

四重唱 完

2007・11・12

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1599d/>

四重唱

2009年3月24日09時22分発行